

# 柳宗悦と筑後の手仕事（一）

大庭 卓也

私は若い頃から、気に入った本を繰り返し読み返す癖がある。多読の人と比べたら読んだ本の数は断然少なくなるが、その代わり、じっくり時間をかけて著者の文章や思考方法に向き合った本が少しずつ増えてゆく。柳宗悦著『手仕事の日本』（昭和二十三年刊）は、高校生の頃からのそうした愛読書の一つである。なぜこの本を手にしたのかはもう覚えていない。世に言う文学少年などではまったくなく絵ばかり描いていた私は、芸術雑誌を拾い読みしていたので、何かの記事で本書のことを知ったのかもしれない。

柳宗悦（明治二十二年―昭和三十六年）は、大正から昭和にかけての美術評論家。日常生活の器具に美を見出そうとした「民芸」（民衆的な工芸、という意味）という概念を提唱し、思想家や芸術家たちとともに様々な活動（大正十五年から始まったいわゆる民芸運動）を通してその普及に努めた。『手仕事の日本』は、二十年近くの時間をかけて日本に残る手仕事を实地踏査し、後世に伝えるべきものを吟味して、その魅力を若者へ向けて紹介したものだ。

そして大学院へ進んだ頃には、あるテーマのもとに膨大な物証を収集分析する宗悦の研究姿勢にいたく共鳴するようになっていた。久留米大学に赴任して十数年が過ぎたが、今度は宗悦が筑後の手仕事をどのように紹介しているのかが気になってきた。再び本書を開いてみたいと思う。

○九州の手仕事探訪は焼物からで、有田焼（佐賀県有田町周辺）、薩摩焼（鹿児島県）、小鹿田焼（大分県日田市）、小石原焼（福岡県朝倉郡）に続いて、筑後の焼物としてはみやま市（旧三池郡）高田町二川地区の「二川焼」を第一に挙げている。

：筑後にある窯場では三池郡の二川を挙げるべきでありましょう。仕事場として美しい茅葺の建物が見られます。この窯は昔北九州地方でよく描かれた松絵の大埴鉢や水甕を、一番近年まで焼いていたところでもあります。近頃また再興しましたが雄大な作品であります。ここで出来るもので水甕や蓋附壺によい品がありますが、甕で「利休」と呼んでいる黄色い釉薬のがあります。この色は特別に美しくやや艶消の渋い調子であります。：

浅野陽吉著『筑後陶器考』（昭和十年刊）は当地の焼物に関する基礎的研究だ

宗悦はその年の三月に東京で開催する「現代日本民窯展」の準備のために、水谷良一（官僚）や河井寛次郎（陶芸家）らと二川焼の角熊五郎窯を実際に訪問。その時陶工たちに松絵の復興を促し、河井がデザインを描いて指導したと言う（『工芸』三十九号〈昭和九年二月〉所収の水谷「筑後の二川」）。民芸運動に協力したイギリス人の陶芸家バーナード・リーチが、同年の二月末から三月上旬まで角窯に滞在して二川焼を調査したのも（『みやま市史』通史編下巻、令和二年刊）、宗悦たちの強い勧めがあったからに違いない。先に触れた『筑後陶器考』がまとめられたのはリーチの滞在後だが、角熊五郎が松絵の復興に目下努めていることが特筆されている。『手仕事の日本』で宗悦が二川焼の松絵を「近頃また再興しましたが見れば、昭和十五年頃には角窯が宗悦らの要望に応じて松絵を見事に再現していたのだろう。」



赤坂焼・梅竹文徳利（福岡県立美術館蔵）



赤坂焼・染付落雁文皿（同館蔵）



赤坂焼・黄釉蝸尻茶碗（同館蔵）

諸事情で戦後に出版されているが、原稿は昭和十八年に書き終えられており、「記してある内容は大体昭和十五年前後の日本の手仕事の現状」（序）だと言う。本書をひもとく人は、戦前まで残っていた手仕事の数々を東北から沖縄へと探訪する旅に誘われることになる。

○旅は、次のような書き出しで始められている（第二章「日本の品物」）。私はこれから日本国中を旅行致そうとするのであります。しかし景色を見たり、お寺に詣でたり、名所を訪ねたりするものではありません。その土地で生れた郷土の品物を探しに行くのであります。日本の姿を有ったもの、少くとも日本でよくこなされたものを見て廻ろうとするのであります。それもただ日本のものというのではなく、日本のものとして誇ってよい品物、即ち正しくて美しいものを訪ねたく思います。：

高校生の私は、清々しい文章にまず心をひかれた。大学で国文学を学び始めて本書を読み返したときには、この清々しさは、宗悦が白樺派（人道主義や理想主義を唱えた文学流派。代表作家に武者小路実篤や志賀直哉らがいる）の人々と親交を持っていたことに根差しているのではないかと思いついた。

が、本書によると二川焼の起源は江戸時代後期に遡り、明治初年に米作（明治三十年頃まで存命）という弓野焼（佐賀県武雄市で作られた唐津焼の一種。松の絵を大胆に描いた鉢や甕で有名）の陶工が二川へ来て松絵の技法を伝えたが、間もなく途絶えたと言う。

宗悦が松絵の二川焼を初めて手にしたのは、大正十五年（昭和元年）の夏、

長野県小諸の道具屋においてであった。その時はどこの陶器か分からず、以後仲間たちと調査を進め、松絵の陶器は江戸時代初期から北部九州（宗悦は「北九州地方」と呼んでいる）すなわち佐賀県唐津や武雄一帯で盛んに作られたもので、最後に二川の地へ伝わっていたことを明らかにしている（柳宗悦著『工芸の道』〈昭和三年刊〉の「挿絵について」、民芸運動の機関誌『工芸』三十三号〈昭和八年十月〉所収の水町和三郎「松模様を描た北九州の古窯跡」、水谷良一「二川の陶業」、柳宗悦「同人雑録」）。さらに昭和九年一月には、

『みやま市史』は、明治大正期に二川焼の窯元は八軒あり、昭和の初めに四軒、戦時中に湯たんぼや飯椀などを製作したあたりから次第に窯の火は消えてゆき、昭和三十年頃には角窯だけが残ったと記す。宗悦が「仕事場として美しい茅葺の建物が見られます」と讃えた光景は、現在高田町の上楠田から下楠田にかけて点在する窯跡から偲ぶよりほかはない。

○次に、筑後市赤坂地区の「赤坂焼」。これは、黒田藩の御用窯として栄え



二川焼・二彩松文壺（福岡県立美術館蔵）

た高取焼（福岡県福岡市早良区西新周辺）と同じ作風のものとして、

…久留米近くに赤坂の窯があります。西新町の系統を引く品物を焼きます。

と、ごく簡単に紹介されている。この焼物について『筑後陶器考』は、文化九年に八女郡水田の次郎吉という陶工によって始められ、以後三原と緒方という二つの家が経営したこと、有馬藩の御用窯となつて藩主用の食器や茶器を製作したこと、九代藩主有馬頼徳が興した柳原焼、十一代藩主頼成が興した東野亭焼の陶匠を務めたこと、明治以降は民窯（一般民衆の日用品を焼く窯）として緒方家の人々によつて維持され、昭和九年当時は三軒の窯元があったことなどを伝える。そして戦後昭和三十年頃までにそれらはみな休止状態となり、一旦復活を遂げたが（昭和五十三年刊『増補筑後陶器考』の附録「春夏秋冬楽しい窯めぐり」における緒方正明氏の赤坂焼の解説）、『筑後市の文化財―平成16年度版―』（平成十七年、筑後市教育委員会）には、すでに生産されていない旨が記されている。この焼物の関連品で今も作られているものに、赤坂焼の陶工たちが余技として作っていたという「赤坂人形」がある。合わせ型に土を押し形を作り、素焼きにして色を付けた素朴な玩具で、昭和五十五年三月には福岡県の特産工芸品・民芸品に指定。現在では赤坂焼

よりもむしろこの玩具のほうがよく取り上げられている。

なお『手仕事の日本』では赤坂焼に続けて、

もとより歴史に有名な窯で廃れてしまつたり全く昔の面影がないほどに衰えてしまつたものも少くありません。例えば肥前の唐津や、または現川や、筑前の上野や、筑後の八代の如き、昔の勢いは過ぎ去りました。…

と、すでに衰退した九州の窯として「筑後の八代」というのがある。唐津焼（佐賀県唐津市）、現川焼（長崎県）、上野焼（福岡県田川郡）と並べるに相応しいのは、やはり熊本藩の御用窯であつた八代焼（高田焼）で、「筑後」は「肥後」の誤りであろう。

（文学部国際文化学科・日本近世文学専攻）

\*『手仕事の日本』の引用はワイド版岩波文庫本（平成十五年刊）により、適宜読み仮名を加えている。所蔵品の画像を提供下さつた福岡県立美術館にお礼を申し上げます。



久留米大学文化財保存科学研究部会

〒839-8502 福岡県久留米市御井町1635

<http://kurumbunkazai.jp/>

令和3年3月20日発行

印刷：城島印刷株式会社

〒810-0012 福岡市中央区白金2丁目9番6号

## 伝統工芸の国・筑後 第二号

